

平成21年度 グループ対抗

里山デジカメ選手権

身近な森林の再発見!! 入選作品集



主催 近畿中国森林管理局 箕面森林環境保全ふれあいセンター
 共催 滋賀県立琵琶湖博物館／(財)水と緑の惑星保全機構・里地ネットワーク
 協賛 (株)ニコン
 後援 朝日新聞大阪本社／NHK 大津放送局／(財)森林文化協会／毎日新聞社大阪本社



はじめに

近畿中国森林管理局長 朝比奈 清



皆さんこんにちは、ただいま紹介いただきました近畿中国森林管理局長の朝比奈と申します。

本日は、「グループ対抗里山デジカメ選手権」の最終審査を公開で行うこととしましたところ、おいで頂き感謝申し上げます。また、審査対象の皆様におかれましては、発表の準備をされ参加していただきましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

さて、私どもの近畿中国森林管理局は、東の石川県から西の山口県まで2府12県の国有林を管理経営する林野庁の出先機関です。

滋賀県内においては、国有林が琵琶湖周辺にも点在しており、これらの国有林は大部分が里山で、その保全と整備は重要な課題となっています。

里山というのは、比較的最近使われるようになった新しいことば、環境への関心の高まりの中で人と自然がうまく共生しているシンボルとしての言葉です。国際的にも日本の里山に関心が高まっており、里山がそのまま英語にもなって使われています。来年は生物多様性条約会議が名古屋で行われます。この会議、COP10では、日本は里山イニシアチブということで、里山という概念を世界に発信していこうという取組をしているところです。

しかし私たちの周囲を見ますと、今本当に里山と呼べる所がどれだけあるのか。かつてはひとが森に立ち入って、様々な恵みを受け、それによって森がまた生育し、いろいろな生物の多様性が維持されてきました。そのような関係が続いたわけですが、50年ほど前の燃料革命により、薪や炭というものから石油に変わりました。今日は小さな子どもさんがたくさんいらっしゃってますが、薪や炭を見たこともない子どもさんもたくさんいると思います。

また農林業の衰退により、人が山に目を向けなくなったというのが今の現状だと思います。

このような荒廃した里山の現状を回復していくのは非常に大変なことです。まずは、人間が里山に関心を持つこと、何らかの新たな視点で里山を見ていただく。そういう意味で、デジカメという最新の技術でできた器具を通じて、里山に関心を持って頂き、何らかのつながりを持っていただくということが必要だと思います。そういう思いで、この催しを今年も開催させて頂いたものです。

今日の審査には、里山をテーマとして第一線で活躍されております写真家の今森光彦さん、森林生態学者で農学博士の只木良也さん、NHKの番組などで全国約800箇所を旅され、里山を含む日本の風土に御造詣の深いフリーアナウンサーの青山佳世さんをお願いしております。

このあと、青山さんを司会に、今森さん、只木さん、それと当森林管理局の下地頭所森林官による「身近な里山」をテーマとしてミニトークショーを行い、里山について語っていただきたいと思います。

その後、最終審査として、審査対象の30グループの代表の方に、作品の説明やその思いなどを発表して頂くことになります。発表者の熱い思いなどを今日御出席の皆さんとともに分かち合うことができれば大変うれしく思っております。

最後になりましたが、本日の審査会の開催に当たりましては、滋賀県立琵琶湖博物館さんをはじめ7団体の様々な関係者の皆様の御支援と御協力を頂きました。本来ならこの場で逐一御紹介すべきところですが、時間の関係もごさいますのでお手元の配付資料をもって御礼と御紹介に代えさせて頂きたいと存じます。

今回の「グループ対抗里山デジカメ選手権」をきっかけとしまして、里山について更に関心が高まり、人間と自然との共生できる国作りが進むよう祈念致しまして、御挨拶と致します。



里山デジカメ選手権の審査員がかる “身近な里山”

青 山) 皆さん、こんにちは。



今日は各地からお集まりいただき、また素敵な作品応募してくださいましてありがとうございました。

今回は、私ども審査員が、いつもどんな活動をしていて、里山に対してどんな思いを描いているのか、そんな話をさせていただきたいと思います。

自己紹介も含めて、普段どんな活動をなさったり、里山とどんな関わりをしているかということについて、お話をさせていただきたいと思います。

只木先生からお願いできますか。

只 木) ご紹介いただきました只木と申します。

只木良也 (ただきよし) で、先生の名前は、ペンネームですかとよく言われます。「ただ、木がある 良しなり」ということで作ったような名前、これは親からもらった名前です。



いつの頃からか森林とか森、木そういうものに足を踏み入れ、大学を出て、最初は、国の林業試験場にいたのですが、長野県の信州大学で高地生物学という講座ができるということで、行きました。

そこに十何年かいて、今度は名古屋大学から人手が足りないのに来てくれないかということで行き、定年で名古屋大学を辞めました。辞めた後、環境アセスメントの会社が、名古屋に支店を作りまして、そこに行き、愛知万博関係で忙しくしておりました。愛知万博は、里山をテーマとした万博でした。

先ほど局長の話にもありましたが、里山って何だろうって言われると、皆さんお困りになる。それぞれの人がそれぞれの定義を持っており、十人十色でいろんなことを考えています。簡単に言えば、昔、農業のために使ってきた林というのが一番正解だろうと私は思います。農業のために使ってきたというのは何だというと、落ち葉を採ってきて、肥料として使う。或いは、薪を採ってきて農家の焚き物にする。燃やした後は、灰が残る。灰はまた肥料になる。というように使ってきたのが里山。里山って言う言葉が日本の辞書に出てきたのが、今から20年前です。それより前の辞書には無いのです。では何と書いていたかというと、百人一首にありますように「外山 (とやま) の霞立たずもあらなむ」。外の山と書きます。内の山から段々と外の方へ出てきて外山、外の山になります。同じような言い方で端山 (はやま) というのがあります。端の山と書きます。奥山から連なってきた、人里に近い所の端の山。そんなところが里山でございます。

青 山) 続いて、今森先生お願いいたします。

今 森) 今森と申します。よろしくお願いします。

私の場合、長年、琵琶湖の周辺部で写真を撮ってきてまして、去年、仕事をまとめる時期があつて



二つの大きな写真展を開いたんですけども、早いもので30年ここにあります。その間、海外にもよく行きまして、熱帯雨林はほとんど行ったことになります。国数は、調べてもらったら38カ国行ってました。私がフィールドにしているのは、高島から大津市の北部です。私の仕事場は、大津市の北部の棚田にあります。その棚田は、歩いていない畦道は無いくらい行きました。

小さな頃から生物がすごく好きでした。ひょっとして写真家になったら、生涯この好きな被写体と一緒にいれるのではないかという思いで、プロの写真家になったわけです。生き物と接しているうちに一つ不思議なことに気が付きました。というのは、僕がいつも見たいと思っている生き物が、どんどん少なくなっている。人が暮らしている所に棲んでいる。原生林とか言いますが、そういう人が全く行かないところには、あんまりいない。なんだろうってすごく不思議です。

只木先生がおっしゃったように、以前は里山という言葉がなかったですが、でも概括的には僕の中には里山はあったんです。つまり共存する空間にいるということです。人が住んでいるけども、生き物も棲む空間が確実に存在します。

僕がプロの写真家になった30年前には、田んぼはネイチャーではなかったんです。ネイチャーフォトグラファーというのは田んぼとか撮らなかったんです。こういう真っ直中に私はデビューするんです。長く、今でも戦っているんですが、実は。そういうしこりが我々の業界は残っているんです。例えば、皆さんも知っているような、〇〇提供の日本自然の写真コンテストみたいなものでは、人は入れちゃいけない、人が入ったら自然じゃないといわれるんです。それに凄く反発してきました。結局は、今見ているたくさんの生き物たちは田んぼとか雑木林とか、只木先生がおっしゃった奥山も人が関わっていれば、共存空間だと思うんです。

どこに自然があるんだろうという話になるんです。そういう田んぼとか、人が関わっている森とかを自然とみなさないと、自然は存在しなくなるんです。僕にとっての里山というのは、そういう概念かなって気がします。そういうことを頭に描きながら共存の空間を、僕としては写真家なんで、映像に合わせるということを日々やっています。

青 山) それでは、森林官の下地頭所さんですが、お仕事の紹介と下地頭所さんがどうしてこういう道を選んだのかということを含めて話をしていただけますか。

下地頭所) 皆さんはじめまして。よろしくお願いします。

今年の7月までは滋賀森林管理署の高島森林事務所にいまして、今は鳥取森林管理署の関金森林事務所で森林官の仕事をしています。森林官って具体的に何をしているのか。その辺を紹介したいと思います。

森林官の仕事は大きく分けると3つに分かれると思っています。一つ目は、国の森林が災害とかで、荒れていないか被害が出ていないか、またゴミが捨てられたり、何か変わったことが起きていないかという山の見回りをする仕事。二つ目は、木を植えて育てて、間伐して市場に出すという森林の整備に関する仕事。三つ目に、小学生に森林教室をしたり森林ボランティア活動のお手伝いをしたりする、私たちは「ふれあい」と呼んでいますがふれあい業務に関する仕事をしています。



また、私がなぜ森林に関わる仕事をするようになったのかといえば、高校生の時に入っていた地域サークルで山に行ってキャンプをする年に一回のイベントをやっていて、その中で三泊四日、山の中の原っぱにテントを張り、トイレも自分たちで掘るといようなことをやり、そこで自然と触れ合うことの楽しさを感じました。これを仕事にしたいなということで、林学科という森林に関する大学に行って、国有林に入り森林に関わる仕事をしています。

青 山) 昔、林野庁の職員って男の人ばかりだったですけど、最近は女性も多いですね。

下地頭所) 昔は森林官は、全然いなかったらしいのですけども、最近増えてきて、近畿中国森林管理局で女性の森林官は大体10人ぐらいだと思います。

青 山) 今森さんは写真家で、素敵な写真を通して自然の風景とか植物とかそういうものを見ると「こういう世界があったのか〜」それだけでも非常にインパクトがあると思いますが、写真の世界にとどまらず、森の中に入って子どもたちと触れ合ったり、いろんな活動をなさっておられる時に、どういう思いで子どもたちと接しているのかも含めてお話いただけますか。

今 森) 写真の仕事をやりながら、10数年前に、高島市の琵琶湖のほとりに、私がよく通っている雑木林がありまして、そこに、クヌギの大きな古木があって「やまおやじ」と呼んでるんですが、そこが乗馬クラブになり、数百本ある古木が全部撤去されるということで、地主に、どうにかならないかと話をしたら、おまえが買えと言われて買いました。それで2haの雑木林のオーナーになりました。そこは、5年くらい放置しっぱなしで、イバラが蔓延って木が一本も生えていない状態で、最初家族でダーッと大きく整理をして、3年目以降に随分有志が増えて、今は100人くらい毎年来て、下草刈りをしています。今年も12月の頭に枝打ちをやります。なかなか伐る作業って出来ないじゃないですか。伐るとにおいがしてくるし、固さが分かります。こういう体験がある。それは素晴らしいです。

それと僕がオーナーになって、所有ということが大事だなと感じました。他人事じゃなくなるんです。ここは20年近く撮っていた雑木林なんですけど、見え方が変わる。外の人だったら外形を見てると、その人の心の中に入って内側から見てるとの違いによく似ています。それぐらい違います。そこで出会う生き物が、ものすごく愛おしくなってきます。そこは、「萌木の国」って呼んでいるんですが、全国昆虫キャンプってのをやっていて、全国から120人くらいの子どもたちが集まります。イベントというか昆虫採取をやります。毎年毎年、参加者が増え、おかげさまですごい競争率です。なぜそれをしたかという、昆虫採取を含めて体験的な要素が少なくなっている。知識はあるんですけど、大体の子どもはカブトムシ等の昆虫を物扱いしています。昆虫がいる環境が分からない。なぜここで生きられるかというのが一番大事だと思うのです。

全国昆虫キャンプは3日間で、子どもたちだけで採取する昆虫の種類は150種類になるんです。150匹じゃないですよ。150種です。それは私の知識の範囲内で数えただけでそうなんです。未同定のものも含めると多分180ぐらいになると思います。なんで雑木林にこんなにたくさんの生き物が生きられるか。素朴な疑問だけど不思議がります。

これが例えば鬱蒼と茂っているブナの原生林に行くと採れない。子どもたちは見つけれられない。なんで雑木林では見えるのか。そういうことを学びたいなと思ってやり始めたものです。

青 山) 子どもたちを含めて、雑木林に入る機会が少なくなっていることですね。

今 森) 機会が少ないというよりも、入る所がない。にせものの雑木林が多いのです。十中八九、雑木林と呼ばれているのは、昔の雑木林でなくて、放置された、ほったらしの林なのです。そういうところにはカブトムシ等は棲めません。

青 山) 一見、雑木林というのは、手つかずのとか思うけど、人間の営みと共に作られていった林なんですね。

今 森) そうです。そういうところを説明ではなく、体感的に子ども達に学んで欲しいと思い、活動をしています。

青 山) 只木先生。里山は農業用の森林という話がありましたけども、今のあるべき雑木林が無くなってきたというのが、里山が崩れてきたこととイコールな感じがしますね。

只 木) 我が国の農業というのは、お米ですね。主体は、水田なんです。水田というのは、斜面を上るのは不得手なんです。上れない。もちろん今森さんのフィールドである高島あたりは、棚田のいいのがいっぱいあります。風景とすれば素晴らしい。それは否定しませんが、あれは非常に労力がかかって、作業の手間とか維持とかすれば、大変なことなんです。

雨の多い日本というのは、斜面には森林が立っていた。そこは水田が上ってこないから、平地は水田になっても、斜面には森林が残された。その斜面に残された森林というのは、水の供給源になります。森林から出てくる水で水田が賄われる。その水の中には、森林からのいろんな養分が流れ込んできます。農家の人たちは、森林へ行って、落ち葉を採ってくる。或いは、下草を採ってくる。そういう物を、田んぼに入れるわけです。片一方では、山から薪を採ってきて、かまどで燃やす。囲炉裏で燃やす。農家では一年中、火が燃えています。燃えた後には灰が残ります。この灰も肥料になった。灰の方は、今風に言えば無機肥料、落ち葉は有機肥料です。

里山から流れてくる水は絶えない。飲料水にもなり生活用水にも農業用水など、すべてのものになったわけです。これが里山なんです。

つまり水田と森林が、うまい具合に共に栄えてきたという関係が日本の里山。こういう例は、世界にあんまりないんです。

里山類似のもので、どここの国の里山というのを聞きますが、日本のように徹底して使われてきた里山というのは、無かった。もっとも、この里山の使い方が酷すぎたら、これは森林自体が維持できなくなって、アカマツ林になったり、いわゆる雑木林になったり、さらにもっともつとみんなが使うと、その森林もダメで草っ原になったり荒地になったりハゲ山になる。人間が維持した後の雑木林というのが、里山の典型です。

青 山) 里山を大事にしましょうというのは、木を植えたり下草を刈ったりするだけじゃなくて、農業とかいろんな人々の生活そのものが森と共に成立しないと里山は守りきれないということなんですね。

それでは、下地頭所さんにちょっと伺いたいと思いますが、国有林というところどうも奥山の方だけにあって思っていたら、意外に身近な所にもあったりするわけですね。今日の里山デジカ

メ選手権もそうですけど、いろんな市民の人たちと一緒に里山とか森を考えるような活動もしてらっしゃると思いますが、そのあたりを話していただけますか。

下地頭所) 国有林というとやはり奥山、山奥にあるというイメージがあると思うんですが、近畿中国森林管理局では、割と都市の近くにある、小面積の国有林というのが非常に多く点在しています。琵琶湖のほとりだと、パッと目立つのは、野洲市に三上山というきれいな近江富士と呼ばれている山がありますが、その半分くらいが国有林です。また、私が以前いた高島森林事務所という所の国有林だと、赤坂山という山が高島トレイルの目立つ山でもあります。

人の生活に近い所にある国有林というのが沢山ありますので、そういうフィールドを使って、先ほど紹介した「ふれあい」という活動をしています。一番多いのは、森林教室ですが、国有林の近くの小学生と一緒に山に登って、森林の働きについて勉強したり、植物について一緒に調べたり、また、ドングリを拾ってきて、木工品とかを作ったり、そういう活動を通じて森林の中で遊んでもらう、国有林の中でそういう活動をして、また森林について興味を持ってもらうような活動をしています。小学生以外にも、一般の大人の方、森林ボランティアの方と一緒に木を植えて、育てるという活動をしています。

青 山) 下地頭所さんは子どもたちとか、一般の方たちとふれあう時にはどんな思いで接してらっしゃいますか。

下地頭所) 私は毎日仕事で山に入りますけども、行くたびに新しい動物だったり植物だったり、いろんな発見があるんです。そういうのを、今森さんがおっしゃったように体験してもらうのが一番重要だと思います。自分でやらないと、森は楽しいって漠然と言われても伝わらないというか、それで終わってしまうと思うのです。自分が実際に行って楽しかったという思い出は残るので、何か気付いて持ち帰ってもらえるようにお手伝いしています。

青 山) これからデジカメ選手権の審査に入っていくわけで、多くのみなさんたちは、仕事や遊びやボランティア活動の中で森と触れ合い、それを一つの写真という形にして表現してくださったわけなんですけど、これから山に入る時とか、森と関わる時に、こんな目線で森を見ると見方が変わるよとか、こんな風にしたらもっと楽しいよとか、みなさんたちから一言ずつお願いしたいと思いますが、今度は逆周りで下地頭所さんから。

下地頭所) 繰り返しになりますが、何度行っても違う景色だったりとか、違う体験ができたりとかがいっぱいあると思うので、一度行ったことがある所でも、あそこはもう行ったから終わりではなくて、また、季節とか時間帯を変えて行くと、いろんな物が見つかるので何度も足を運んでいただけると嬉しいと思います。

青 山) 今森先生お願いします。

今 森) 今、青山さんから振ってもらった質問と違うかもしれないんですけども、今、下地頭所さんの話を聞いてなるほどなと納得しています。僕の一々やっているのもそれに近いところがありまして、写真で現地の農家の人にたくさん会うのですが、獣害とかいろいろ問題が起こりますよね。そう

いう問題っていったい何だろうと思う時、国有林は奥山というか、少しの国有林があるけども、あとはほとんどプライベートな土地ですよね。そこのところの連携というか、それは是非やっていただきたいですね。

今、国有林の方々がこういう場を提供していただいていることは、大変嬉しいことです。どんどん森に人が行ってほしいです。共同の場所なんで、鬱蒼と茂った森にしておくのは惜しいわけですから、人間の本来、昔の農家のように人が使う森にしたいですね。それを実現するために、もうちょっと国民とプライベートな地主がいる場所との連携というか、必要な気がします。

青 山) 動物も国有林も民有林も関係ないように、人も実は関係ないんですよね。

只木先生お願いします。

只 木) いずれにしても、日本という国は雨の多い国で、これだけ開発が進んだといいながら、まだ三分の二、66%が森林という国なんです。その中の国有林というのは、一番の森林持ちなんです。そうすると奥山が中心かもしれないけれども、当然、端の方の里山にも国有林はあるわけです。国有林というのは、それまで持ち主が無かったから、しょうがないから国が治めなければいけない所もあれば、ここは大切だからということで国が治める所もある。国は国で、それぞれの方針を持ってきちんとやる。その中に一つとして、近所の人たちが遊びに来るところを作ってもいいし、レクリエーションというかりラクゼーションとか、一つの社会的な大きなテーマですから、そういうものを提供するのが国有林の努めだと。国有林とか民有林とか、そういうことでなくて、この林はどんな風にこれから使っていこうかと、そのアイディアをみんなで考えて出すと、それに向かって森林の扱いを考える、或いは人の利用を考える。やはり目標が欲しいんです。この山は何に使おうかというのが、レクリエーションでもいいですし、材料提供でもいいですし、谷川で小規模な発電をしましょうでもいいですし。

青 山) ほんとですね。里山ってほんとに身近な存在で、優しい響きなんですけど、今おっしゃったみたいに、ちゃんと木を育てていくこととか、農業のこととか、育てた木をきちんと使っていくとか、ほんとに奥が深い課題があって、出来ることは、少しでも多く、その中に入って、皆さんが色々感じていただいて、次に自分たちは何が出来ののだろうかということを考えて行動していくことなんだろうなと感じました。

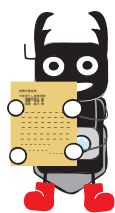
今日は短い時間の中のトークショーということで、何をまとめるというようなものではありませんが、ちょっとそんな視点を頭の中に残していただいて、次に今度、山に入る時に山を見ていただきたいと思います。今回は、皆さんが実際に山の中に入って、どんな思いをしながら写真を撮ってくださったか、次の審査と報告に移りたいと思います。

どうもありがとうございました。

平成21年度 グループ対抗

里山デジカメ選手権

身近な森林の再発見!! 入選作品集



平成21年度グループ対抗里山デジカメ選手権入選作品一覧表

	タイトル	グループ名	部門	メンバー 氏名	所在地
林野庁長官賞	「菅平の黄門様」と お付きふたりが森をゆく	NPO法人 やまぼうし自然学校	森林・ 林業 活動	瑞慶覧 明子 佐藤 明希 西澤 純子	長野県 上田市
琵琶湖博物館長賞	生まれたよ～	トヨタの森	一般	池上 博身 杉山 時雄 大原 満枝	愛知県 豊田市
近畿中国 森林管理局長賞	猿と暮らす	京都教育大学附属 京都中学校	学校	三柴 富 藤井 康之	京都府 京都市
	棚田の春	広島県立庄原格致高等学校 写真部 B		石田 香織 瀧口 杏奈	広島県 庄原市
	赤沢ヒノキ林	NPO法人 自然と緑	森林・ 林業	寺田 知子 寺田 稔	兵庫県 神戸市
	次代の子供たちの ために	京都乙訓ロータリークラブ	活動	中村 一弘 木村 俊六 長谷川 太一	京都府 長岡京市
	里山の木のぬくもり	ファミリー	一般	宮本 関宏 宮本 京子 宮本 許代	広島県 神石郡
	おじいちゃん家の カエル?	ゆうみと この自然を守ろうよ		大藏 夕実 大藏 和代	長野県 伊那市
	森は遊び場	しみずわんぱく隊		清水 政浩 清水 優菜 清水 孝政	福井県 福井市

審査員総評

◎ 今森光彦氏（写真家）



総評として私の方からさせていただきます。

只木先生と青山さんと局長との4名で審査をさせていただきました。

激戦というか結構難しいものでした。昨年もお話したと思いますが、写真だけではなくて、今日発表された内容も加味しながら見ていきますので、難しくなる気がします。

代読していただいた方と直接来られた方もいますが、そこも加味されたのかなという気がします。直接、撮影者が来られて熱弁する方が当然得点は上がります。

私は、この公開審査の前に一次審査をし、本日発表された30作品を選定しました。

去年に比べて若干応募者数は少なかったんですが、レベルはそんなに変わらない感想を持ちました。レベルは変わっていませんが、昨年と違うのは写真のテーマが絞られてきた気がします。といいますのは、応募される方が傾向と対策を飲み込んで、応募されたきた気がします。去年は冒険があった写真もあり、選ぶ方も、びっくりするような写真があったんですが、今年はそのような写真はありませんでした。今年は、ある意味、型にはまっていて、その分、粒が揃った写真があり、選考も結構難しくなりました。

先生方が選び、その横で私も聞いていたんですが、視点というか何を言いたいのかが重要になってきます。3点の組写真ということで、重複している写真があると損をしてきます。組写真のバランスがとれていないと損をするということになります。バランスを見ながら写真の技術と、組の内容を見るということです。

写真のコンテストという視点からいうと、自分の撮りたいものを魅力的に伝える、表現ということを意識して撮られることも大切かと思います。デジタルの時代になって、撮った写真がすぐにその場で見られるようになり、パソコンで整理したり編集したりすることも可能になりました。そんな機能をフルに使って写真の可能性を引き出していきたいと思います。

応募した皆さんの、里山や森や生き物に対する情熱がひしひしと伝わってきました。それはそれですごく楽しい時間を審査をさせてもらいました。ありがとうございました。この後入賞した方の発表がありますが、漏れた方は是非来年も応募していただきたいと思います。



◎ 只木良也氏（農学博士）



私が拝見したのは、一次選抜された 30 作品。これらは、今森さんというプロの目を通してきた作品ですから、写真としてはあるレベルをクリアしたものばかり。写真として、なかなか美しく、アングルもしっかりしているものばかりでした。とすると、その 3 枚の組写真が何を語りかけ、何をアピールしたいのか、そして 3 枚の写真それぞれが、全体のうちの何を受け持ち、かつそれぞれをつなげば、そこにどんなストーリーが見えるのか、といったことが、当然優秀作品選抜のポイントになるはずです。私は、そんなことを考えながら、入選作品を選びました。

ところで、この大会のテーマは、「里山」です。とすれば、「里山」をどう解釈しているのか、ということも重要なポイントです。「里山」、それには人それぞれの解釈があるでしょう。しかし、肝心かなめのことを言えば、それは「森」であり「林」であり、つまり森林なのです。わが国では、「お爺さんは山へ柴刈りに」というように、「山」には木が生えていて、当然なのです。つまり里山は「里山林」という必要がなく、そもそも森林、そして、農村の周辺にあって、農業や農村の生活に使われてきた森林なのです。里山というものが今回のテーマですから、いかに写真自体が好かろうとも、単なる農村風景では飽き足らない、また農地・農村を離れた奥山の風景では趣旨に合わない、と私なりに考えました。複数の審査員の合意の下、今回の入賞作品が決まったのは言うまでもありませんが、今回の第一次選抜通過 30 作品中、私のとくに推薦したい作品が何点かありました。そのうち、とくに強く押したいのは次ぎの 2 作品でした。一つは、一般①ファミリーの「里山の木ぬくもり」。薪割りしている農家のご主人、割り木の積み上げ、そして暖かい囲炉裏端、の 3 枚は、今もなお使われている薪という里山の暖かい産物を、その調製・準備・整理、利用の三段階にうまく纏めていました。もう一つは、一般①散歩好きの「小さな集落」。収穫期を迎えた田圃とそれを取りまく雑木林、気さくに話してくれた草刈りのばあちゃん、そして、林の奥の墓地に至る路脇にひっそりと並ぶ六地蔵。里山を象徴してくれる三つの具体例の組み合わせは見事でした。上記①は見事入賞・森林管理局長賞。しかし、①は残念ながら入賞を逸しました。当日、応募者欠席で、プレゼンテーション文書が代読だったことが効いたのかも。いずれの作品も、なかなかの出来栄え。また来年が楽しみです。

◎ 青山佳世氏（フリーアナウンサー）



この作品は、きっと熱い思いを持って撮影したものだろうと期待してプレゼンテーションを聞くと、以外にも単なる偶然の賜物であったり、それほど期待はしていなくても報告を聞くとしっかりした活動と森への見方があって撮影したものだとわかって感動したり・・・。

毎年のことですが写真だけを見ての選考と、プレゼンテーションを聞いてからの選考はかなり異なりました。しかしどんなにプレゼンテーションがよくても写真そのもので感動が得られなければ、これもまた賞には入りません。非常に高度なことを要求していることは分かっていますが、歯がゆさともったいないという残念さが入り混じり選考に悩みました。

言葉なくてもしっかりと訴えるものがないとよい写真とはいえませんが、もともときちんとした意図があって撮影されたうえで、作品からその思いがにじみ出てこそ本物です。

人間なかなか二兎を追うことは難しく、森の活動に熱心である人は撮影が苦手だったり、撮影することは二の次で行動優先であることも多いでしょう。逆に撮影が得意な人は行動や理論づけが苦手だという人もいます。そこはグループ対抗であることが強みで、得意とする人たちが力を合わせて作品を作れば可能になります。思いは共有していないといけませんが、その役割分担が充分出来ていないところが多く、審査で歯がゆい思いをした残念な理由だと思います。

また全体の印象として森や生き物は美しく撮れている作品が多いのですが、里山の中での人間の生き活きた活動風景や、生活感があと一息撮りきれないようです。

森へのかかわりは汗をかくこともそうですが、その森の魅力や不思議さや、里山と人間や動植物とのかかわりを美しく見せることも大きな意味があります。それを単に映像だけでなく表現してほしいというこのデジカメ選手権には大きな意味があると思っています。

仲間みなさんと力を合わせて、次に里山に出かける時にも「一枚」とってみてください。今までと違う里山が見えてくると思います。



『菅平の黄門様』と
お付きふたりが森をゆく」
NPO 法人やまぼうし自然学校
(長野県上田市)
瑞慶覧 明子
佐藤 明希
西澤 純子

＜メッセージ＞

山々に囲まれた長野県では、森はとても身近な存在。いつでも遊びに行くことができ、いつでも感じることができます。いろいろな表情を見せ、多くの驚きや発見を与えてくれる気持ちのいい空間、森を愛してやまない「菅平の黄門様」とお付きふたりが、早速森を歩いてみました。

澄んだ空気と濃い緑を体中で感じ、いい気分では歩いていると、ゾウにも見える、ジャガーにも見える「一本で二度おいしい」存在感たっぷりの巨木に出会いました。深い緑色のコケにおおわれた根は、すらっと長いゾウの鼻のよう。少し見方を変えようと、ジャガーのお尻に大変身。今にも森から飛び出していきそうな躍動感に驚きました。

葉っぱの裏をひょいっと覗いてみると…あら、かわいい！小さくて真っ赤な虫こぶがたくさんくっついていました。丸い虫こぶはよく目にしますが、この形はなかなか珍しい。あまりに可愛いので、私たちだけのオリジナル名を考えました。名付けて、「葉裏脈ボクシングパンチ」。ボクシングのグローブによく似たこの虫こぶは、その後、この葉っぱ以外の場所では見つかることは出来ませんでした。うれしい貴重な出会いとなりました。

慣れ親しんだ森でも、日々その表情は変化します。多くの方々が森を歩き、その面白さや心地よさを実際に体験して、森を大切に思う人が増えたらいいと思います。

撮影場所：①、②木祖村水木沢
③上田市菅平高原大明神沢

カメラ：①SANYO S7
②Panasonic DMC-LS1
③Canon PowerShot A480

タイトルがすごくおもしろいと思います。森に入る楽しみがすごく伝わってきます。自然学校のメンバーの人が楽しくフィールドノートを持ちながら森林浴をし、気持ち良さそうです。森に入る楽しみというのは、気持ちが良くないとダメなんで、その楽しみが伝わってきます。虫こぶが写っている写真もワイド系のレンズで撮っていますが、写真に変化をつけてまとめてくれました。

(今森 光彦氏)



「生まれたよ～」

トヨタの森（愛知県豊田市）

池上 博 身

杉山 時 雄

大原 満 枝

<メッセージ>

毎年、森で生まれる新しい命「森の赤ちゃん」との出会いを写しました。

雨の朝、森に自然体験学習に訪れた子どもたちと一緒に見つけた宝物。水辺で生まれたのはクロスジギンヤンマ。ヤゴから抜け出したばかりの金色の羽根にしずくがきらきらと光っていました。お日様が顔を出して羽根が乾くと大空へ飛び立ちます。

スポットライトを浴びたようにそこだけ光っている場所に目をやるとマツの赤ちゃん。小さなタネがお日様の光を浴びて一生懸命大きくなろうとしているようでほほえましい気持ちになりました。

今年も森に架けた巣箱からフクロウの赤ちゃんが巣立ちました。ふわふわの綿毛のヒナはまだ上手に飛べません。昼間は若葉の中にそっと隠れて静かに過ごします。森の中で出会った赤ちゃんは、なんだか眠そう。コナラの樹皮を真似て体を伸ばしているように見えます。夜の森では親鳥から餌のとり方を教わりながら飛びまわり夏が過ぎる頃、生まれた森を離れ新しい棲みかを求めて独り立ちします。

フクロウを育む森はたくさんの生き物が暮らせる森。森で出会った小さな赤ちゃんは自然界の中で「食う、食われる」のドラマを繰り広げていきます。五感を研ぎ澄まし、「会いたいなあ～」の気持ちを胸に、身近な里山を歩いてみましょう！素敵な出会いが待っています。

撮影場所：愛知県豊田市

①トヨタの森 自然生態園

②、③トヨタの森林内

一つのテーマに絞ってまとめられているので、インパクトが強い組写真になっています。それぞれの誕生のシーンで、トンボの羽化、マツの萌え木、フクロウの幼鳥と、それぞれがそれぞれの環境の中で生きているのがよくわかる写真で、優れたまとめ方をしています。

（今森 光彦氏）

カメラ：①、②Canon EOS 10D

③Canon EOS 40D



「猿と暮らす」

京都教育大学附属京都中学校
(京都府京都市)

三 柴 富
藤 井 康 之

＜メッセージ＞

田舎の我が家には町内に猿がうようよ！

小学校の時、学区に猿が出たから気をつけて下さい！と緊急クラス連絡が出て藤井君と大笑い。猿なんて毎日バス停に行くまでの道すがら道の端に居る奴を横目で見ながらバスに乗って学校に通ってる。100m先の猿にきゃーきゃー騒ぐ他の友達の方に驚いた。干し柿を作ってもうちちょっとで完成だという日に、家の物干しに干してあった柿は猿の餌食・・・憎き敵ではあるけれど、コラ！と叫ぶとお尻をかいいたり、お尻を見せたり、腹立たしいけど何故か憎めないのは目が可愛いからか？

写真①

鞍馬川河川敷の杉の木に居た猿と今日は目があった。

写真②

鞍馬川河川敷に生えている自生の柿の木は渋柿。母が干し柿作りに頂きに上がると・・・一足先に先客が・・・毎年、人間と猿の柿の奪い合い！？

写真③

につつき猿も冬になり、みぞれ交じりの日。向かいの屋根の上にいる。寒いのに何食べるのかな？猿も生きるの大変だよな、と思えてくる。

撮影場所：京都市左京区静市

ニホンザルというテーマに絞って写真がまとめられています。最近、獣害の問題がすごく増えてきて、柿の実を食べに来たり、人家の屋根にのぼったりとか、よく見るようになってきました。人が野生動物とこれからどのように共存していったらいいか考えさせられる写真です。

(今森 光彦氏)



「棚田の春」

広島県立庄原格致高等学校 写真部B
(広島県庄原市)

石 田 香 織

瀧 口 杏 奈

＜メッセージ＞

私達はこの春、日本の棚田百選に選ばれた広島県安芸太田町筒賀村井仁という集落に何度も足を運びました。そこは、私達の地域と同様に過疎が進み、若者が少なくお年寄りが多い里でした。しかし、この井仁の人達は皆元気で、暖かくフレンドリーでした。そして、私たちに、「この棚田の風景はいいだろう。また撮りに来いよ」と、帰りに必ず言われました。私たちも次に訪れる時には写真をプレゼントし喜んでもらいました。

そうした中で沢山の良い表情の人物写真が撮れました。休耕田もあり、気になりましたが、春だけど少し冷たい心地の良い風が吹く中でどんどんシャッターを切りました。

こうした膨大な撮影したコマの中から、作品としては、カエルと田んぼとシャガの花の写真を選びました。春の若草色でシンプルにまとめました。

井仁の人たちがいつまでも元気で、こうした美しい棚田の風景がずっと守られていて欲しいと思います。そのためには、田んぼの意義、米作りの意義などを見直す必要があると思います。

撮影場所：広島県安芸太田町筒賀村井仁

田んぼの風景ですが、写真の構成がすごくいいと思います。季節をまず、田植えの頃に絞って、広い環境、風景の写真となっています。植えて間もない早苗、カエルというようにバランスよくまとめられ、状況のよく分かる写真になっています。
(今森 光彦氏)

カメラ：①、③Canon EOS Kiss
②Canon EOS 20D



「赤沢ヒノキ林」
NPO 法人自然と緑
(兵庫県神戸市)
寺 田 知 子
寺 田 稔

<メッセージ>

NPO「自然と緑」で9月に木曽赤沢ヒノキ天然林に行ってきました。「自然と緑」は、地球環境を考えながら近畿一円の森林里山整備、子供たち向けの森の学校など自然と人間のかかわり方を作業しながら共に学んでいます。赤沢のヒノキは日本で1番美しいと聞いていました。樹幹がまっすぐに立ったヒノキは神々しく感じました。帰りがけ一瞬射した光の帯が私たちのほうまで伸びてきて、神様が微笑んでくれたように思いました。更新試験場では増えるヒバを処理伐採してヒノキを守り育成しています。明るくなった森の切り株の上に育っている若いヒノキ達です。300年後にはこの小さなヒノキもりっぱなヒノキになっているのでしょうか。針葉樹林内ではなかなか見られないオトメノカサという白いキノコに足元で出会えたことも嬉しいことでした。年輪をしっかりと刻み300余年の時を経たヒノキ林に過去からつながっている自然を見、次世代の実生のヒノキに未来へ続く自然を見てさまざまな生き物が命をつないでいく雄大な赤沢でした。

撮影場所：赤沢自然休養林

三枚の組写真としてすぐれています。まず、全体が分かる大きな環境、風景の写真を一枚入れ、伐採跡から芽吹いているヒノキの場面、低いアングルから背景の森林が見えるように地上から出たキノコと、写真的に見ても優れたものになっています。

(今森 光彦氏)

カメラ：RICOH CAPLIO R7



「次代の子供たちのために」
京都乙訓ロータリークラブ

(京都府長岡京市)

中 村 一 弘

木 村 俊 六

長谷川 太 一

＜メッセージ＞

京都府長岡京市は全国でも有名なタケノコや竹の生産地です。

しかし、近年は、隣接の森林に竹が侵入し、雑木林が竹林になりつつあります。それは、安価な外国のタケノコや竹材が輸入され、国内のものが売れなくなり、竹林の手入れをしなくなってきたのも原因の一つです。

私たち京都乙訓ロータリークラブは創立40周年事業として、何か次代の子供たちの残せるものを作りたいと「ロータリーの森づくり」に取り組むことにしました。

まず、森林に侵入してきている竹の伐採をして、元の雑木林に戻す作業に取り掛かりました。勿論、長岡京の伝統的なタケノコ用の竹林は見本林として残していきます。

今年の春には、これまでの竹林からの贈り物のタケノコをみんなで掘って、山で食べました。夏の間にロータリーの会員の手で竹の伐採や除草をしてきました。

今、12月の記念植樹に向けての準備に取り組んでいます。

子供たちと一緒に植樹をし、子供たちが大きくなるとともに、植樹した木々も成長していくことを楽しみに山に来てくれることを期待しています。

雑木林にカブトムシを探しに来た子供たちの声が響く山になる事を願っています。

撮影場所：京都府長岡京市

いいタイトルです。里山は今、竹林をどのように整備したらいいのか結構問題になっていますが、それに対して取り組んでいる状況がよく分かります。タケノコを焼いて食べたりとか、人がうまく利用しながら竹林が守られていったらいいと思います。その状況がほのぼのと伝わってくる作品です。

(今森 光彦氏)



「里山の木のぬくもり」

ファミリー

(広島県神石郡)

宮 本 園 宏

宮 本 京 子

宮 本 許 代

<メッセージ>

美しい紅葉も終わり、やがて、里山に雪がちらつく頃、一人のお年寄りが無心に斧を振り下ろしていました。割られた木々の山また山。これから訪れるであろう寒い寒い冬の季節に備えての薪割りである。

パシッという力強い音とともに、だんだんと山のように薪が積まれていく。割られた薪は、きちんと並べられ、積まれていく。

「さあ、みんなおいでなさい。お茶を飲んで、みかんを食べてゆっくりしていきなされ！」囲炉裏の煙が、そう語っているかのようにあたりをほんわか暖かく包み込んでいる。

「暖かいですね。やっぱり冬はこれに限ります。」そう言っているおばあさんの赤い笑顔が印象的でした。

撮影場所：①世羅町

②、③神石高原町

まさに木のぬくもりというタイトルのごとく、山に暮らすと、エネルギーは薪とかが大事になってくるんですが、薪を割り、薪を貯めて、薪を使っている。こういうエネルギーの使い方がこれからもっと広がってくるといいと思います。

(今森 光彦氏)



「おじいちゃん家（ち）家のカエル？」
ゆうみとこの自然を守ろうよ
（長野県伊那市）

大 藏 夕 実
大 藏 和 代

<メッセージ>

この3枚の写真は、お父さんから大きなカメラを借りて、おじいちゃん家で沢山撮ったものの一部です。おじいちゃん家は、愛知県の山の中にあり、田んぼや畑、川には沢山の生き物がいっぱいいます。

この組写真は、カエルの表情がおもしろいと思って選びました。

1枚目の写真は、お盆に庭で花火をやっていたら、大きなカエル（ヒキガエル）が出てきました。ゆっくりとのっしのっしと歩いていたので、それを寝ころがってカメラで撮りました。カエルは、突然のフラッシュにびっくりしているようです。カメラが重いので地面につけて撮していたらお父さんに「レンズは付けちゃダメ」って突然言われて私もびっくり。

2枚目の写真は、秋の連休におじいちゃん家に稲刈りに行った時の写真です。折角行ったのに稲刈りにはまだはやかったので、またお父さんのカメラを借りて写真を撮ることにしました。池の近くへ行くとトノサマガエルがいたので写してみました。このカエルはぴょんぴょん跳ねるので、最初は、とても小さく写してしまい見えなかったり、ボケたりしてしまったけれど、地面において写したらきれいに写せたので選びました。

おじいちゃん家から伊那の家に帰ってきて白いアジサイ（アナベル）の上にいつもいるアマガエルを写すことにしました。私の頭くらいの所にいて、お父さんのカメラでは重すぎて、小さくてぼけてしまったり、かぜでゆれたり、どうしてもうまく写せません。この写真はその時一緒にいたお母さんが写したものです。アナベルは、6月頃から緑色の花を付け、真夏に真っ白になります。そして少しずつページュっぽくなって、ドライフラワーになります。

他にもたくさんのカエルを写したけど、1番うまく撮れた写真を応募しました。

最後に、おじいちゃん家では、季節ごとにいろんなカエルに出会えます。カエルだけでなくいろんな生き物にも出会えます。こんな環境を私も大事にしたいと思います。

撮影場所：①、②愛知県北設楽郡
③長野県伊那市荒井

おじいちゃん家に遊びに行ったときにいたんですかね。3種類とも違うカエルで、それぞれの表情のとらえ方が上手いです。正面から見た、いいポーズを狙っています。すごく変化があります。そして上手くまとめてくれています。カエルの表情がすごく素敵です。

（今森 光彦氏）



「森は遊び場」
しみずわんぱく隊
(福井県福井市)
清 水 政 浩
清 水 優 菜
清 水 壺 政

<メッセージ>

1枚目の写真は、家族で福井県池田町に行った時、長女 優菜が撮った写真で、池田町総社の須波阿須疑神社（すわあづきじんじや）の前の一里塚のケヤキです。境内山頂には大杉もあるのですが、このケヤキは、一里塚を守るように枝を伸ばし、本人も何か暖かさのようなものを感じたのでしょうか？

2枚目の写真は、福井市の廃校になった旧美山町上味見小学校あとで活動しているNPO法人自然体験共学センターで遊ばせてもらった時の写真です。写真はツリーハウスですが、写っているのはしみずわんぱく隊の長女「優菜」と長男「壺政」です。あまりに楽しそうなのでシャッターを押しました。上味見小学校は、過疎化が進み廃校になりましたが、今は形を変え子ども達の拠点に生まれ変わっていました。写真には写っていませんが、この日も福井市内の小学生が来て里山で自然体験を満喫していました。

3枚目の写真は、子どもの友達とみんなで福井県坂井市の福井県総合グリーンセンターで毎年10月に開催される「フラワーグリーンフェア」に行った時の写真です。長男 壺政がツリークライミングを楽しむ友達を撮りました。ツリークライミングは、アメリカで始まった日本ではまだ新しいスポーツで専用のロープや安全具を使って、木に登ります。登る前と後に必ず木にあいさつをするなど木や森、自然と友達みたいーに一体感が味わえるスポーツです。最初は、なかなかロープワークに慣れませんでした。慣れてくると楽しそうに上り下りを繰り返していました。

今回、この「里山デジカメ選手権」の写真を通して里山について見つめなおすことで、森や木が昔から自然崇拝の源として大切に守られ、その一方で、私たちの生活の中では、家や家具、燃料として生活にぬくもりを与え、子ども達の遊び場を提供してくれていることに気付かされました。また、それらは時代が変わっても、関わり方や使い方は多少変わっても森や木の存在は変わっていませんでした。これからも、変わることはないと思います。

森や木は、普段身近すぎてあまり家族で話題にすることもなかったので考えるいい機会となりました。子ども達にも森や木の大切さが伝われば幸いです。

撮影場所：①福井県池田町
②福井県福井市旧美山町
③福井県総合グリーンセンター

カメラ：Canon EOS Kiss N

道路の横の社と大きな古木があります。昔はこういう社に行くと象徴的な木があって、ご神木になっていましたけども、そういうところで私も遊んだことがあるんですが、写真ではツリーハウスの様な中で遊んでいますね。うらやましいです。子どもの遊び場として、こういう場所が戻ってくるとすばらしいです。（今森 光彦氏）

一次審査総評

今森 光彦 氏（写真家）



全体として、昨年より粒が揃い、レベルが高かった印象を受けました。多分、3回目ということもあり、応募の仕方が分かってきたというのが大きいと思います。1枚の写真で発表することに比べ、3枚組の写真で発表するというのは、表現が難しい。単刀直入に趣旨をかい

つまんで、自分のやりたいことを3枚で構成しないと、人に自分が何をやっているのか、何に感動したのか伝えにくくなります。そのやり方に、これまでの1回、2回と見てきて、こんな方法ですればいいのかというのが定着してきた感じがします。だから粒が揃っていた感じがします。

今回、一次審査で選んでいて、全体にレベルが均一していた印象を受け、おもしろかったです。これは3つの部とも同じことが言えます。今回、学校の部の応募が、インフルエンザの関係もあって少なかったと聞き、ちょっと残念ですが、最終審査をするのは、とても楽しみであり、結構、接戦になると思います。

第一次審査選定作品【学校部門】

「3つの緑」
虫好きブラザーズ
(大阪府高槻市)



Canon ND 60

「田植え体験」
広島県立庄原格致高等学校
写真部A
(広島県庄原市)



①Canon EOS Kiss Di

②、③ Canon 30D

「森の中の大発見!!」
大原がくいん莉帆&颯馬
(京都府京都市)



Canon PowerShot A460

「“山へおいでよ”
森林体験交流学习」
岡山県立勝間田高等学校
(岡山県勝田郡勝央町)



Canon PowerShot A570 IS

第一次審査選定作品【森林・林業活動部門】

「みんなで広葉樹の森を
大きく育てよう！」
千年の森づくりグループ
(岡山県久米郡美咲町)



Canon PowerShot S-40

「観察会から…命を見ヨ！」
渋川ビオトープの会
(滋賀県草津市)



Canon IXY DIGITAL 820 IS

「里山を守るお地蔵さま」
清水・小脇街づくり委員会
(滋賀県東近江志)



LUMIX DMC-TZ1

「箕面の山よいつまでも」
箕面の山パトロール隊
(大阪府箕面市)



①Nikon D700
②KONICAMINOLTA DiMAGE Z2
③OLYMPUS CAMEDIA C-740

「森を歩き、学び、遊ぶ」
九州森林インストラクター会
(熊本県熊本市)



SONY Cyber-shot

「ちかとみなみの理想の森」
理想の森プロジェクト
(京都府京都市)



Canon EOS Kiss Digital

「阿蘇の涅槃像」
自然大好きグループ
(熊本県合志市)



CASIO EXILIM

第一次審査選定作品【一般部門】

「蜻蛉三題」
共生（ともいき）
（京都府京都市）



Canon PowerShot G9

「森の証言者」
西区愛山会
（滋賀県高島市）



Canon EOS Kiss X2

「よみがえる茅葺き民家」
男鬼楽座（滋賀県立大学）
（滋賀県彦根市）



①、②Nikon D100
③Canon PowerShot G9

「雑木林キツネノカミソリ」
家族
（大阪府高槻市）



Nikon D200

「山里の秋」
兵庫県立山崎高等学校職員
（兵庫県宍粟市）



Canon EOS 50D

「東北の思い出」
夫婦二人旅
(新潟県上越市)



Nikon COOLPIX

「小さな集落」
散歩好き
(奈良県生駒郡平群町)



SONY Cyber-shot

「里山の花」
(株) 森林テクニクス
大阪支店 Gチーム
(大阪府東大阪市)



- ① Canon PowerShot A620
- ② Nikon D40
- ③ FUJI FinePix V10

「東中国山地緑の回廊
ワークショップ in 上山高原」
東中国山地緑の回廊
(大阪府大阪市)



- ①、③PENTAX Optio W30
- ②FUJI FinePix F-50fd

「目に見えない里山の力」
Kーサイエンス
(神奈川県横浜市)



Nikon COOLPIX

最終審査会場 滋賀県立琵琶湖博物館



琵琶湖博物館玄関



最終審査会場前の作品展示



表彰式

最終審査終了後 作品展【平成 21 年 11 月 7 日～ 23 日】

琵琶湖博物館特別展示室



近畿農政局「消費者の部屋」入選作品展示

【平成 22 年 1 月 4 日～ 29 日】



近畿中国森林管理局「森林のギャラリー」応募作品展示

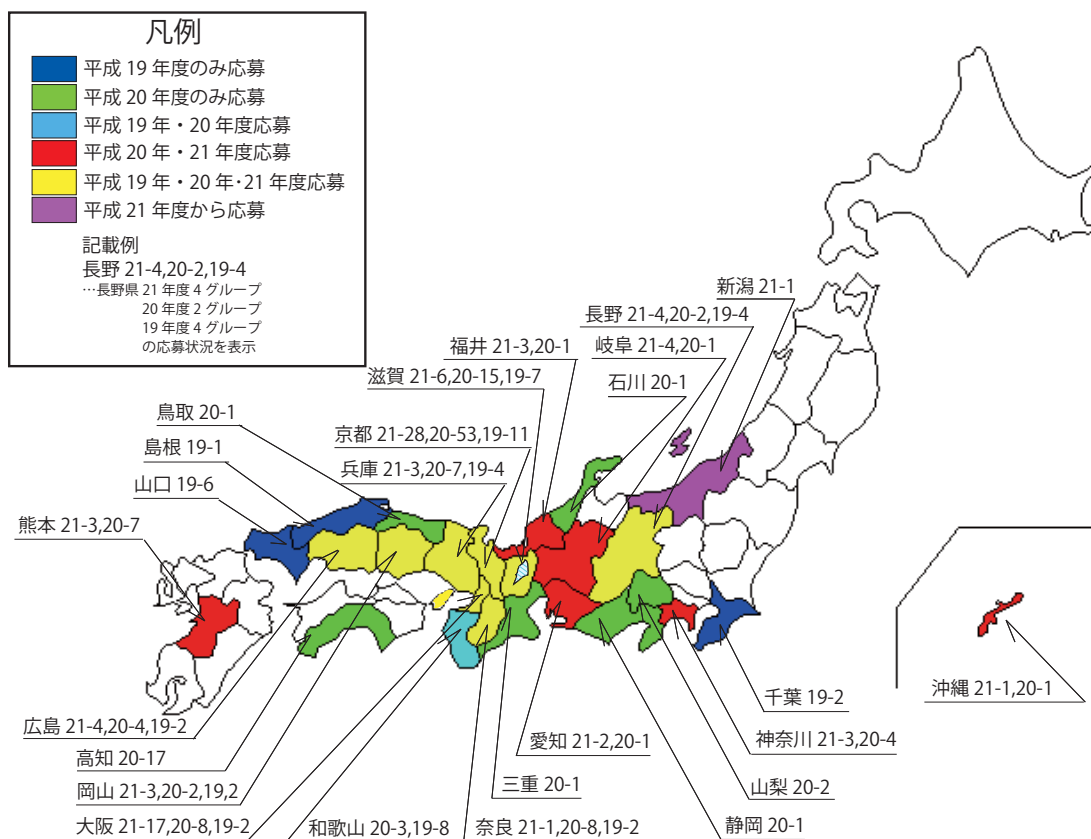
【平成 22 年 2 月 1 日～ 12 日】



平成 21 年度グループ対抗里山デジカメ選手権地域別応募状況

	グループ名		グループ名		グループ名
新潟県	夫婦二人旅		三柴家 (T・K・T Jr.)		醒が井・雲仙フィールド (SRF)
長野県	ゆみとこの自然を守ろうよ		2人でサイクリング		きんきちゅうごく森林づくりの会
	NPO 法人やまぼうし自然学校		京都精華大学		しおんじ山の会
	暮らしの学校だいだらぼっち		森林ボランティア「フォレスター宇治」		箕面の山パトロール隊
神奈川県	自然を楽しみ隊		京都乙訓ロータリークラブ		NPO法人自然と緑
	夜星を見上げ隊		理想の森プロジェクト		柏原ボランティア相談会
	Kーサイエンス		京都森林インストラクター会		虫好きブラザーズ
愛知県	トヨタの森		NPO法人自然と緑	奈良県	散歩好き
	あいち海上の森大学		しぜんのか 大原学院		兵庫県立山崎高等学校職員
岐阜県	TEAM HATASA		レインボーフラワー	兵庫県	寺田
	家族		大原がくいん 莉帆&颯馬		NPO法人自然と緑
	なかよし親子		きれいな自然		キリンビール(株)岡山工場
福井県	しみずわんぱく隊		京都府立北桑田高等学校1年1組	岡山県	千年の森つくりグループ
	森山		京都教育大学附属京都中学校		岡山県立勝間田高等学校
滋賀県	西区愛山会		社団法人アジア協会アジア友の会	広島県	ファミリー
	福井工業高等専門学校		家族		広島県立庄原格致高等学校写真部
	男鬼楽座 滋賀県立大学		山の道		九州森林インストラクター会
	渋川ビオトープの会 (小学校 PTA 他)	大阪府	MOMO 萱森蘇りチーム	熊本県	森の OB ガールズ
	清水・小脇街づくり委員会		箕面市立萱野北小学校		自然大好きグループ
京都府	ヒノキ工房		株式会社森林テクニクス K チーム	沖縄県	城跡の水辺に生けるテナガエビ
	杉工房		株式会社森林テクニクス G チーム		
	共生 (ともいき)		株式会社森林コンサルタント		
	MORI FAMILY		東中国山地緑の回廊		

※ 林野庁長官賞 琵琶湖博物館長賞 近畿中国森林管理局長賞 一次審査通過作品



応募規程

(1) 対象者 ①～③のジャンル毎に、グループを単位とした 3 枚組写真（2～3 名で 1 グループ）

- ① 学校関係グループ（小学校～高等学校）：学校、学年、クラス、クラブ等
- ② 森林・林業に関する活動グループ：NPO 法人、森林インストラクター会、任意グループ等
- ③ 一般グループ（①②以外のグループ）：大学、研究室、クラブ、町内会、会社、家族等

(2) 写真

「身近な森林（もり）の再発見!!」をテーマとして、学校、森林ボランティア、企業、家族、友達などのグループが共同作業によって創作したデジタル写真作品にしてお寄せください。ただし、撮影地は国内に限ります。

○ 応募点数に制限はありません。1 グループで何点でもご応募いただけます。

二重応募（同一の作品を複数の写真コンテストに応募し入賞する）、または、類似した作品は認めません。

応募作品は未発表のものに限ります。

○ サイズは A 4 版カラー印刷 3 枚 1 組（2～3 名で 1 グループ）

○ デジタルカメラで撮影した作品、または、フィルムをスキャナー処理した作品も応募いただけます。

ただし画像加工した作品は失格とします。（画像加工とは：実在のものを消したり、ないものを描いたり過度に色を変えたもの。トリミング、自然な濃度や色味の調整などはこれに該当しません）

○ 応募作品の返却は行いません。

○ 被写体への肖像権については、撮影者が了解を得てください。

○ 応募作品の画像データ（ファイル形式：JPEG）を CD 等に焼いて提出して下さい。

○ 写真の裏面には 3 枚ともそれぞれ応募票を貼付。写真は縦に 3 枚並べて審査するため、展示順の番号を記入（上から 1, 2, 3 順）して下さい。

(3) メッセージ

3 枚 1 組に対して 400～600 字程度の事象の意味や背景、あるいは被写体と森林との関係や里山への想い、活動などについてのメッセージを添付（様式は任意）

応募票(切り取ってご使用下さい)

写真①

3枚1組の タイトル			
代 表 者 住 所	〒		
ふ り が な 氏 名 年 齢	[1]グループ代表者 才		
	[2] 才	[3] 才	
代 表 者 連 絡 先	TEL : FAX : Email :		
グループ名 (学校名)			
撮影場所 年 月 日	場 所 : 年 月 日 :		
写 真 デ ー タ	写真番号 : ① カメラ機種 : 撮影画素数 :		
この募集をどこで知 りましたか? (○で囲って下さい)	1 ホームページ 2 新聞 3 ラジオ 4 知人等 5 学校 6 知っていた 7 その他 ()		

写真②

3枚1組の タイトル			
グループ名 (学校名)			
撮影場所 年 月 日	場 所 : 年 月 日 :		
写 真 デ ー タ	写真番号 : ② カメラ機種 : 撮影画素数 :		

写真③

3枚1組の タイトル			
グループ名 (学校名)			
撮影場所 年 月 日	場 所 : 年 月 日 :		
写 真 デ ー タ	写真番号 : ③ カメラ機種 : 撮影画素数 :		

平成 22 年 (2010 年) 3 月発行

平成 21 年度「グループ対抗里山デジカメ選手権」

編集・発行 箕面森林環境保全ふれあいセンター (林野庁近畿中国森林管理局)

〒 602-8054

京都市上京区西洞院通り下長者町下ル丁子風呂町 102

京都農林水産総合庁舎内

TEL: 075-414-9049

FAX: 075-414-9029

ホームページ <http://www.kinki.kokuyurin.go.jp/fureai/>